

---

# 遊戯王GXに転生したのかな？

カイバーマン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戲王GXに転生したのかな？

### 【ZINE】

Z1830Z

### 【作者名】

カイバーマン

### 【あらすじ】

一応転生ものを書くつもりです。

初めてなので色々ミスがあると思いますが暖かい目で見守ってください。

## プロローグ（前書き）

初めての投稿です。一応。一回ミスつたので事実上一回目ですが。  
楽しんでいただければ嬉しいです。では。

## プロローグ

田を覚ましたら見覚えの無い天井が見えた。

「あれ？このテンプレはまさか？」

「まさかってなんだい？」

声のする方をふりかえると、ちつちつと女の子がいた。

「まさか、神様の手違いで俺が死んでせめてものお詫びに別の世界に転生させたあげるよ。とかじやないよな？」

嫌味っぽく綺麗な笑顔で聞いてあげた。

すると幼女さんは冷や汗をダラダラかきはじめた。

「うん。どうやら図星らしい。でもせっかくなのでもうひとつ尋ねてみる。

「そんでもって君がその神様だなんて馬鹿みたいなことないよね？」

幼女は汗だくとこうか、もはやナイアガラの「」とくだけやつと神様？がしゃべりはじめた。

「すまんのじゃー。許してほしこのじゃー」

すげえ。初めて見た。神様の十下座。こんな見たことあるの？この世で俺だけなんじゃなかろうか。あ、この世じゃないのか。

それにしても幼女が涙田で十下座つてすいへ罪悪感があるじやないか。でも弄るのはやめない。楽しいから。

「へー。やっぱ瓶のせこなんだー。でもああ謝つてすむ話じやないよね。」

やべえ。幼女マジ泣きだ。さすがにやりすぎたかな？でも謝らない。外道？なんとでも言え。俺は以外と苛ついているんだ。

「まあいいや。んで俺はどこに行くの？」

「許してくれるのか？」

「はあ？」

「はい。」めんなさい。お主が行くのは遊戯王GXの世界じゃ。」

「ふーん。んで特典は？」

「特典？」

「ドローカアップとかカード一式とかさあ。何かしらあるでしょ？」

「ならば何時でも神様に相談出来るとかはどいつもじや？」

「ミスで人を殺すようなドジつ娘に相談するほど落ちぶれてねーよ。」

「

「むぐう。なら何が良いのだ？二つまでならかなえてやるぞ。」

「ナメック星人かよ。じゃあまず一つ目。昔、俺が住んでた世界に存在するカードを全部GXの世界に送る」と。

「了解じゃ。」

「二つ目向ひの生活で困らない程度のものをくれ。」

「それはさつきのカードと一緒にいこや？」

「おお。中々のサービス精神だね。ミスを許す気は無いけど。」

「むぐうう。まあ良い。」  
「いつ田は？」

「いつ田は精霊を見えるみたいですね。」

「了解じゃ。」

「じゃあ最後、向いつの世界に行つたら俺に一切干渉しないこと。」

「どうにいりとじや？」

「要は向いつの世界で俺に関わるなってこと。話かけたり夢に出てきたりとかするなってこと。」

「お主はワシのことが嫌いなのか？」

やべえ。今回のはさすがに弄るとかそういうレベルじゃねえ。本気でショックを受けているっぽい。一応フォローバreira入れとくが。

「違つて。結構元の世界で色んな人に迷惑かけたから、第一の人生くらい他人に迷惑かけたくないんだ。」

「分かったのじゃ。そういうなら仕方がない。」

「じゃあ向いつの世界に送るが。」

「ああ。分かった。」

「じゅあ皿をつぶれ。」

俺の意識はそこで無くなつた。

## プロローグ（後書き）

かなり自分のには長くかいたつもりです。ミスなどがあつたら指摘してください。お願いします。

## 第一話～おい、テュエル小姐～（前書き）

こんな超展開に誰がした！まあ僕なんですねけどね。  
登場人物のしゃべり方がおかしいかも？  
まあとりあえず読んでくれたら嬉しいです。  
では。

## 第一話～おい、デュエルしろよ～

「...は？ 私はだれ？... なんてネタやつてる場合じやなかつた  
！」

ふざけてると背後から声が聞こえた。

「おい。ガキがこんな時間にこんなところでなにをしているー。」

あれえ？ まさか生活できるものって刑務所とかじやないよね？

～数時間後～

「どうした？ 早くディスクを構えろ。」

あれえなんていきなりデュエルなの？ まあしゃあない。とりあえず使つても問題なさそうなデッキをださないと。うん。これでいいかな？

「あの～ 一つ聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「なんで『テコエル』するんすか？」

「仕方ない。説明しよう。」

（説明開始）

「社長！社内を歩き回っていた子供を確保しました。」

「そんなガキ、追い出すか親を呼び出せばいいだらう。うう」と  
で俺を呼ぶな！」

「ですが社長。その子供の持ち物のなかにこれが…」

「なんだ！…………」「これは……まあ、そんな」とありえん……！」

「調べたところ『ピーパー』カードと云ふことでもなさそりです。」

「そのガキを『テコエル』場に連れてこ……」

「了解しました！」

といつ訳だ。

「わかりました。」

「おつと。使つ『テッキ』はいつまで指定させてもいいわ。」

「えつー・?」

「貴様も使つんだろ?。青眼の白龍をーーー!」

「やばいって。問題が起つたから使わないでおいたの通りにいたのよ!」

「わかりました。ただし条件があります。」

「なんだ。言つてみろ。」

「俺が負けた場合すべて説明して帰ります。俺が勝った場合、俺の住む場所を提供してください。もちろん事情は正直に話します。」

「よかろう。ふんつ貴様が俺に勝つなど不可能だからな。」

よし。まさかこの賭けに乗つてくれるとは思わなかつたがラッキーだぜ。

「じじゃあーあああああああー!」

「「デュエル!?!?!」

「先行は貴様に譲ろ?」

「じゅあ遠慮なく。ドローダー!」

手札6枚

「俺は未来融合フューチャー・フュージョンを発動！ 対象はF・G・D！ テックからミンゲイドラゴン2体と青眼の白龍、そして伝説の白龍2体を墓地に送ります。」

「ふん。 墓地のカードが増えただけではないか。」

「さらに伝説の白龍の効果を発動！」

「1Jのタイミングで発動する効果だと…？」

「1Jのカードが墓地に送られたときテックから青眼の白龍を手札に加えます。さらに古のルールを発動！ 手札のレベル5以上の通常モンスターを特殊召喚します。現れろ！ 青眼の白龍！」

「グオオオオオ…！」

「うおー！ ソリッドビジョンすげえええ…！！！」

「カードを一枚伏せてターンエンド！」

場

青眼の白龍

未来融合フューチャー・フュージョン

伏せカード2枚

手札3枚

「俺のターン！ドロー！」

海馬

手札6枚

「俺は正義の味方カイバーマンを召喚！」

ちょ WWWおま WWW社長がカイバーマンって WWW

「カイバーマンを生贊に青眼の白龍を特殊召喚！さらに魔法カード滅びの爆裂疾風弾を発動！貴様のモンスターを全て破壊する！さらにブラッド・ウォルスを攻撃表示で召喚！」

「バトル！ブラッド・ウォルスでダイレクトアタック！」

「そつはさせない！罷カード発動！正統なる血統。蘇れ！青眼の白龍！」

「くつ。カードを一枚伏せターンエンドだ。」

「エンドフェイズ時、速攻魔法サイクロン。伏せカードを破壊！」

「くつ（俺の収縮が！）」

「なつなにーー?」

「海馬さん。このターンで決めますー!」

手札2枚

海馬

手札3枚

「俺のターンーー!ドローーー!」

「魔法カード発動!手札断殺!お互い手札を2枚墓地に送り一枚ド

手札4枚

手札2枚

青眼の白龍 ブラッド・ヴォルス

海馬 場

「魔法カード発動！滅びの爆裂疾風弾！海馬さんのモンスターを全て破壊する！」

「なんだと！？しかし貴様の青眼の白龍は攻撃することは出きんぞ！次のターンで逆転してやる！」

「言いましたよね。このターンがラストターンだ！！魔法カード発動！竜の鏡！墓地の青眼を3体除外し、現れろ！青眼の究極竜！」

「バトル！！青眼の究極竜でダイレクトアタック！！アルティメット・バースト！！！」

「うわあああああ！」

海馬

LPO

「ありがとうございました。」

「ふん。約束通り住居は用意してやる。ただし納得のいく説明をし

る。」

「はー。」

「どうあれ今田は社員の部屋を貸してやる。話は明日の朝だ。」

「わかりました。では。」

## 第一話～おい、テューハル小姐～（後書き）

なんでこんな事にしちゃつたんだね？  
続きが作りにくいじゃないか。ふんふん。  
はい。自己責任です。すいません。  
こんな駄文でも感想などをいただければ嬉しいです。では次話で。

## 第一話～住む場所ゲットだぜ～（前書き）

今回は「テュエル無し」の回です。ちなみに今後アニメ版とOOGで効果の違うカード（天よりの宝札など）は基本OOGに準じます。アニメ版効果の場合後書きに書くつもりです。

## 第一話～住む場所ゲットだぜ～

「うお、すげえ。」

「うお、すげえ。」

案内されたのは高級ホテルのよつな部屋だつた。  
窓の外に青眼が描いてあつたり、青眼の銅像が置いてあつたり社長  
の趣味全開だな。

「こんな部屋に来たらアレをやるしか無いでしょ。」

軽く助走をつけて俺はベッドに飛びこんだ。

「うわあ、めっちゃ柔らかい。」

「では、明日の朝迎えに来ますので。」

やべえ、めっちゃ恥ずかしい。案内係しきお姉さんに苦笑された  
よ。とりえず何かしら返事しなきや。

「わかりました。ありがとうございます。」

お姉さんは優しげな微笑みを残していった。

あれは好意じゃないな。絶対。弟を見守る日だ。

元々あるお姉さんよりおそれりへ年上だつただけに、余計恥ずかしい。

「とつあえず寝よ。」

「朝になつて

「パンパン」「パンパン

「ひきこなあ。いいや、また寝よ。

「パンパン」

しばらく無視して寝ていたらノックが止まつた。  
「あ、勝ったぞ。

「ガチャツ」

ん?なんだ今の音。まあいいや。寝よ。

「起きてください。」

頭を搔きぶるなあ！仕方ない起きるか。

「？？？」

「何ですか？」

ちよつと待つた。頭を整理しよう。

朝、目覚めたら目の前に美女がいる。

OK状況は把握した。

夢だ。そう考え俺は意識を手放した。

「寝ないでくださいば、おーい。」

「しようがないなあ。」

「うひやあー？」

「あつ、起きました？」

うん。夢じやないらしい。といつ」とは数センチ前にあるこの美人

さんの顔は…

「とりあえず離れようか。」

「あつ、はい。わかりました。」

やつと分かった。昨日の案内係さんだ。

「つていうか、どうやって起つた?」

「いえ。特に何も。」

「すげえ目が泳いでる。ソレはソのセリフだろ。

「異議ありー! 証人ポッケから出てこる猫じゃらしひ何ですか!」

「いやあーつて某裁判」つこしててる場合じやありませんー。社長がお待ちです。」

やべえ。社長怒らせたら何が起きるか分かんねえぞ。

「すいません。つてあれ?」

「何ですか?」

「昨日は気にしなかつたけどお姉さん身長いくつへりですか?」

「一応平均へりですけど? それが何か?」

「すいません。鏡貸してもりますか?」

「へーどうぞ。」

鏡に映つたのは、少年の顔だった。

「ちつちやくなつてゐるー。」

「何がですか？」

「何でもないです。気にしないでください。」

「分かりました。では社長室へ。」

（社長室へ）

「この俺を待たせるとはいひ度胸だな。」

田茶苦茶怒つてますやん。助けて、お姉さん。  
あつ逃げてゐ。いつの間にーこの裏切り者ー！

「人の話しが聞いているのか！！」

「すいません。本当にません。」

「ふん、まあいいだらう。さあどうあえず貴様の身の上話を聞いて

や。」

面倒くやがりな声だけじ田はあらわしてゐる。無駄に高等技術だ。

「説明開始」

「説明終了」

「ふん。異世界からきたなど到底信じられないが。まあ本当なのだろう。青眼が良い証拠だ。」

「ありがとうございます。」

さすが社長、話の分かる奴だ。

「でも俺が外で青眼使つたら問題になりませんかね？」

「ふん。その点に関しては俺が何とかしておいつ。」

社長めつちやいい人ですやん。

「ヒーリング家はどつねれば？」

「アパートを用意してやつたしづらへむれいじで暮らすがいい。家具  
くらこは用意しておいてやる。」

「あの～大変申し訳無いのですが働き先を用意してくれませんか？」

「子供が働けるようなぬるい場所、ここにはない。生活費の仕送り  
をしてやる。」

「いやいや。ただでわいませして貰つわけには行ませんよ。」

「何を勘違いしている。ただのわけなかつー。」

ですよね～

「貴様の世界にあつたというカードを作りませんわ。」

えつ？それだけ？

「せりにそのカードを踏まえた禁止制限リストを作るのに協力して  
もらひ。」

「分かりました。ありがとうございました。」

「今更だが貴様の名前を聞いておひが。」

「本当に今更ですね。」

「「ひるねむこーー早く答へるーー」

「俺の名前は杉崎美咲です。」

「杉崎ミサキか。どんな字だ?」

「美しく咲くで美咲です。」

「貴様が美しく咲くで美咲だと女のよひな名前だな。」

「まあ両親が名付けたので何を考えて付けたのかわかりませんがね。」

「

「まあいい。アパートの住所はこれだ。カードは1ヶ月ほど預からせてもらつがいいな?」

「はい。」

「貴様と連絡が取れるようこれも渡しておひつ。」

「ありがとうございます。」

そして俺はアパートに向かつた。

社長もある程度の常識はあるのか、そんなに大きくない言つちゃえば普通のアパートだつた。

「よかつた。さすがに海馬コーポレーションの部屋みたいな部屋だつたら落ち着いて暮らせないもんな。」

俺はソードヒーロー普通の日々を過いでいたのだった。

## 第一話～住む場所ゲットだぜ～（後書き）

どうぞよろしく。文章がおかしかったり誤字脱字などありましたら教えてください。  
では。

## ～プロフィール～（前書き）

前回投稿したのをちょっと直しました。

## ♪プロフィール

杉崎美咲

12歳（戸籍上）

23歳の時に転生。気づいたら12歳くらいのサイズになっていた。

### 特徴

精神的に人をいじめるのが好き。

恩や義理は必ず返す。

恩を受けた人を悪く言われたりするとキレる。

自分の気に入らない奴にたいしてはとことん外道。

元々の世界ではシンクロは使うがエクシーズは使わなかつた。  
どちらかというとファンデッキが好き。

顔立ちは女の子っぽい。俗に言う男の娘。

使用デッキは不特定。やたらデッキを作る癖がある。

## 「プロファイル」（後書き）

明日が明後日くらいには更新するつもりです。

## 第四話～アカトニア収穫なつ～（前書き）

すいません。前回の投稿がおかしなことになつていていたので直しました。

本文の削除だけでこんなに時間がかかるとは自分の機械音痴っぷりに驚きです。

## 第四話～アカデミア受験なつ～

転生から半年たつて、禁止制限リストがやっと完成した。要は2011年9月の禁止制限から強欲な壺と天使の施しを制限に落として、天よりの宝札とかのアニメ版チートカードを制限にしただけ。

時間がかかった原因は強欲な壺と天使の施し。社長が禁止化を激しく拒否つたから。

シンク口関連のカードは言わないでおいた。だつて元の世界みたいな「ワンキル？よくあるよくある。」何てことになつたら楽しめないじやん。

DDBとか。DDBとか。黒羽とか。

俺は数少ないファンデッキ使いなの。

代行とか真六とかクジヤドとかマジ勘弁。

そのあとは割と普通だった。

変わったことといえば、海馬とデュエルして勝つ度に一つだけお願ひを聞いてもらえるつていう、アンティデュエルをしたことくらい。デュエルに勝つて良かった。社長の生エネコンとか中々聞けないぜ？

まあそんなこんなで3年間過ごしてました。

（三年後）

「明日は寝過ごすな。デュエルアカデミアの試験だからな。」

「は？ もう

「あれだけ金を出してやったのだ。宣伝くらいしてもらわんとな。

「分かりましたよ。その件を出されたら断れないですもんね。」

「ということで俺はデュエルアカデミアに通うことになつた。てか受かる」と前提で話してゐるな。落ちる気無いけど。

（実技試験）

受験番号3番、デュエル場に来なさい。

「こちにむかは。試験官の茂部だ。全力でかかつて来なさい。」

おこおい名前からしてモブキャラの鏡だな。

「ううん、ほほ確実に勝てるけど使う方も使われる方も見てる方も  
なたが決めて下さい。」

「一つ目、ほほ確実に勝てるけど使う方も使われる方も見てる方も  
つまらないデッキ。」

「一つ目、勝率は低いけど使われる方も使う方も見てる方も楽しめる『テック』。」

「三つ目、勝率は微妙で使ってる方は楽しいけど使われる方からするとえげつない『テック』。」

「いくら筆記が良かつたからとこつて調子に乗りすぎじゃないか？ 一つ目の最も強い『テック』でくるといい。」

「分かりました。先行はあなたからどうぞ？」

「舐めてかかるといたい目にあつぞ？ 私のターン！」

茂部 手札6枚

「私は重装武者—ベン・ケイを攻撃表示で召喚！」

『重装武者—ベン・ケイ』

ATK500

効果「このカードは通常の攻撃に加え、このカードに装備されたカードの枚数分攻撃することができる。」

「更に私はテーモンの斧2枚と魔導師の力を2枚そして団結の力を装備！」

重装武者—ベン・ケイ

ATK500 8300

「あの馬鹿！ 苛立つて試験用『テック』じゃない『テック』を使つたね！」

試験官のリーダーらしき人が何か叫んでる。周りの受験生があいつ

終わつたなとか言つてゐるけど無視無視。

「じゃあ俺のターン。」

手札6枚

「俺は王立魔法図書館を守備表示で召喚。装備魔法折れ竹光を装備。」

王立魔法図書館

DEF2000

自分または相手プレイヤーが魔法カードを発動する度このカードに魔力カウンターを1つ乗せる。（最大3つまで）このカードに乗つた魔力カウンターを3つ取り除くことでカードを1枚ドローする。

折れ竹光

装備魔法

装備モンスターの攻撃力を0ポイントアップする。

「はつ、そんな装備カード何の役に立つ。」

「つるむさい。何も無いなら黙つてや。」

「更に成金ゴブリンを2枚発動。合計で2枚ドローしあ前は2000ポイント回復。」

王立魔法図書館

魔力カウンター3

「王立魔法図書館の効果で1枚ドロー。」

王立魔法図書館  
魔力カウンター0

「トウーンのもぐじを発動。効果によりトウーンと名のついたカードを手札に加える。もぐじをサーチ。もぐじ発動。もぐじをサーチ。もぐじを発動。ブルーアイズ・トウーン・ドラゴンを手札に加える。」

王立魔法図書館  
魔力カウンター3

「図書館の効果で1枚ドロー」

「数十分後」

「さつきからドローばかりで勝つ気はあるのかーお前の『テッキは後一枚しか無いじゃないか！』

「これで最後ですよ。魔法図書館の効果で1枚ドロー。はー、俺の勝ち。」

「何を言つている？私のライフは10000もあるぞー。」

「だから勝ちですって。はい。エクゾディア。」

「いんなのエクゾエルじゃない！認めん！」

「は？ルールですよ？そんなに不満なら海馬コーコーポレーションに抗議すればいいでしょ、う？」

「ぐぬう。もう戻りなさい。結果は後日送ります！」

「負け犬の遠吠えですね。」

「なんだと！？」

「おお怖い怖い。やよなう～」

帰ろうとしたところでシロノスに止められた。

「他の生徒の『デュエルを見ておくノーモ、大切な勉強なノーネ。観客席で待ってるノーネ。』」

「あいにくですが、あの程度の『デュエル見るほどいの物でもありますん。』

「ペペロンチーノ！？あの程度とは随分と余裕があるノーネ？」

「まあ試験官のベン・ケイワンキルにワンキルしましたからね。」

「ならば私と『デュエルするノーネ！試験官に勝つたところトッキを見せてみるノーネ！』

「分かりましたよ。」

「「決闘！！」」

「先行はセニヨーラに譲るノーネ。」

# 俺は男なんんですけど

久しぶりにイハツとしたセ!!

「なんなノーネ。対戦相手いらないノーネ。  
「なら別のデッキでやってやるよ。」

# 決闘！！

私の先攻なノーナー!!

ガリトを2枚併せて大巻を発動する「仁者！」

「私の伏せカードは黄金の邪神像！さらに一体のトーケンを生贊に古代の歯車巨人を召喚するノーネ！カードを2枚伏せてターンエンドなノーネ！（私の伏せカードはミラーフォースと攻撃の無力化。攻撃してきたーらミラーフォースで返り討ちなノーネ。）」

## 古代の歯車巨人

ATK3000

効果：このカードは特殊召喚できない。このカードが攻撃する場合、相手は魔法、罠カードを発動することができない。このカードが攻撃した時、このカードの攻撃力が守備表示モンスターの守備力を超

えている時その数値分相手プレイヤーに戦闘ダメージを与える。（  
今後、貫通能力と呼ぶ）

クロノス  
手札0枚

場

古代の歯車巨人  
伏せカード2枚

「俺のターン！カードを2枚伏せ、歯車街を発動！さらにフィールド魔法を伏せる。」

「プレイミスなノーネ。せっかくのフィールド魔法が破壊されてしまうノーネ。」

「歯車街の効果発動！このカードが破壊された時デッキ、手札、墓地のいずれから古代の歯車と名のついたカードを特殊召喚することができる。」

「なんですよーとー？しかし、古代の歯車の上級モンスターは特殊召喚できないという制約を持つているはずなノーネ！」

「俺はデッキから古代の歯車巨竜を特殊召喚ー！」

古代の歯車巨竜

ATK3000

効果

このカードは以下のモンスターを生贊に召喚した場合次の効果を得る

グリーンガジェット

このカードは貫通能力を得る。

### レッドガジェット

このカードが相手プレイヤーに戦闘ダメージを与えた時、相手プレイヤーに400ポイントのダメージを与える。

### イエロー・ガジェット

このカードが相手モンスターを戦闘によつて破壊した時、相手プレイヤーに600ポイントのダメージを与える。

「なんのーね！？ そんな古代の歯車いなはばなノーネーそれに何故あなたが古代の歯車を持っているノーネー？」

「そりゃあ未発売のカードですね。何故持つているかは、あなたが勝つたら教えてあげますよ。」

「さらに伏せカード発動！歯車街！さらに大嵐！2体目の巨竜と黄金の邪神像トークン2体を特殊召喚！」

### 黄金の邪神像

#### 効果

このカードが破壊された時邪神像トークン（攻守1000）1体を特殊召喚する。

「邪神像トークンを生贊に現れろ！古代の歯車巨人！」

ちょっと場の確認。

### クロノス

#### 古代の歯車巨人

#### 手札0枚

#### 伏せカード無し

### 美咲

#### 古代の歯車巨人

古代の歯車巨人  
古代の歯車巨竜

手札1枚

伏せカード無し

「私の負けなノーネ。」

「まだまだあー！リミッター解除を発動！機械族モンスターの攻撃力を倍にする！エンドフェイズ時にこの効果を受けたモンスターを破壊するけど関係ねえ！」

「覚悟しろよー！この白塗り野郎！ー！」

「まつ待つノーネ。勘弁して欲しいノーネ！」

「バトル！古代の歯車巨人で古代の歯車巨人に攻撃！－アイアンクローー！」

「何かポケン臭がするノーネ。」

『ズバアー！』

見事に古代の歯車巨人が真っ二つになった。

「ペペロンチーノ！」

クロノス

LP 40000 1000

「古代の歯車巨竜で直接攻撃！－！」

「ペペロンチーノ！私の負けなノーネ！」

クロノス

LP1000 - 5000

「古代の歯車巨人で直接攻撃！！アルティメット・パウンド！！」

「ペペロンチーノ！！！オーバーキルなんてひどいノーネ！」  
「これで文句ないですよね？アカデミアの実技担当最高責任者をワン  
ターンキルしたんですから。他の受験生のデュエルは見なくていい  
でしょう？」

「分かったノーネ。勝手にするノーネ。」

「こうして俺のアカデミア受験は終わったのだった。」

## 第四話～アカデミア受験なう～（後書き）

次話は3日以内に投稿するつもりです。

ついでに、すぐ今更感あるけどオシリスOCG化おめでとう！  
すぐにデッキを作りました（笑）。

基本的に美咲の使うデッキは作者のマイデッキ（現実、ゲームのどちらかで）なので是非使わせたいのですがストーリー的に無理っぽいです。

では次話でお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1830z/>

---

遊戯王GXに転生したのかな？

2011年12月19日08時54分発行